

イランの稲作

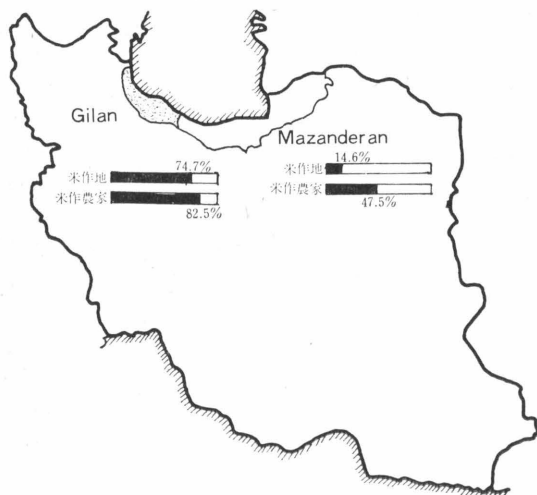
おか ぎき しよう こう
岡 崎 正 孝

I

1965年11月から2カ月にわたり、「中近東諸国の農業生産性に関する現地調査」としてイランとシリアにおもむいた。調査の主目的はイランにおける農村構造の実態調査, なかんずく, イラン農業の一類型(湿潤灌漑農業)とみなしうるカスピ海地方の米作農村の社会経済構造を, 乾燥地域におけるそれと対比しつつ, その実態を把握し, 将来の変化の方向を見定めることにあった。このためにカスピ海地方のギーラン州を調査地域に選び, 同地方における一般的な調査を行なった後, ラシュト(Rasht)市の近くのハサナバード村で悉皆調査を行なった。調査の全般的な報告書は, 追って別の機会に発表の予定であるが, ここではハサナバード村ならびにギーラン州各地で行なった聞き取りをもとに, 当地方における稲作について記してみた。

まず, 本論にはいるに先だち, イランにおける稲作を統計の面よりみてみよう。1960年の農業センサスによると, 作付け延べ面積650万ヘクタールのうち, その80%弱(520万ヘクタール)は麦作に当てられ, 米作地はわずか

第1図 ギーラン州とその稲作のウエイト



第1表 州別稲作付け面積

州	作付け延 べ面積 (ha)	稲の作付け 面積		稲作付 け地の 作付け 延べ面 積に占 める割 合(%)	降水量 (mm)
		実数 (ha)	割合 (%)		
計	6,540,637	328,761	100.0	5.0	
Tehran	406,407	—	—	—	188.2
Gilan	234,504	175,211	53.3	74.7	2,161.3
Zanjan Arak	268,582	892	0.3	0.3	
Mazandaran	715,466	104,713	31.8	14.6	1,046.8
Gorgan					
Semnan	61,695	—	—	—	
Damghan					
E. Azerbaijan	1,063,301	4,460	1.3	0.4	216.6
W. Azerbaijan	280,126	951	0.3	0.3	276.8
Kordistan	244,609	25	0	0	136.8
Kermanshah	568,865	450	0.1	0.1	313.8
Khozestan	434,416	25,524	7.8	5.9	102.5
Khoramabad	249,055	257	0.1	0.1	
Bakhtiari	124,680	1,220	0.4	9.8	
Fars	671,453	8,543	2.6	12.7	213.8
Kerman	146,028	—	—	—	129.5
Balchestan	74,931	3,102	0.9	4.1	177.5
Khorasan	873,153	189	0.1	0	230.4
Esfahan	123,366	3,224	1.0	2.6	69.9

(出所) 筆者編,『イラン農業統計, 1339: 1960』,
アジア経済研究所内資料, 1965年。

5%の33万ヘクタール弱にすぎない。しかし, 米作は第1表にみられるように地域的にかなりの偏在を示している。すなわち, ギーラン, マーザンデラン両州で全国の米の総作付け地の85%を占め, とくにギーラン州は全国の55.3%を占めている。また同地方では総作付け面積の75%弱が米作地となっている。つまり, ギーラン州はイランにおける米作地帯ということができよう。

米作がこのように上記両州にかたよっているのは, 両州の自然条件による。すなわち, 一般に乾燥的という言葉で代表されるイランの中で, アルボルズ山脈の北側のカスピ海沿岸地方では, 年間1000~2000ミリメートルの降水量を期待することができ, また夏はかなり高温多湿である。このような自然環境を背景に当地方で稲作が行なわれているのである。その他の地方ではホゼスタン, ファールスなど南部地方で若干その栽培がみられるが, これは夏期における高温と川からの灌漑によって成立しているにすぎない。

イランの稲作でも, ヘクタール当たり収量は国際的にみてけっして高いとはいえない。1960年度の統計によると, 全国平均, もみで2158キログラム, 精米で約1.3トンである。州別にみてもたいして大きな差はないが, 主

現地報告

産地であるギーラン州では2219キログラム（もみ）となっている。

農業生産の面では小麦がその中心をなすことはすでに述べたとおりであるが、米もかなりの重要性をもっている。作付け面積では小麦、綿に次ぎ、また生産額でも綿に次ぎ第3位を占めている。従来はロシアに対する重要な輸出品としての役割を果たし、現在でも余剰分は輸出されている。しかし近年急速に、おもに都市において米の消費がふえ、国内需要が増大したために、1万トンほどの輸入をしている(1960年)。上に述べたように米はそのほとんどがギーラン、マーザンデランの2州で生産されているが、当地方では約20万の農家が稲作によって生計を立てているのである（ギーラン州では約90%に当たる）。米作地帯ではイラン高原地方の麦作を主とする典型

的なイラン農村とは、村落形態、土地所有、経営構造、村落の社会構造などの面で完全に異なった様相を示している。このような点よりイランの稲作を研究することは、イラン農業の一つの重要な側面にも光を当てることになるのである。

II

まず、稲作の農作業より概略する。稲作に関するすべての作業は、春分を元日とするイラン暦の正月, Farvardin 月より始まる。Farvardin 月の13日(4月2日ごろ)は Sizdah badr といって野遊びの休日であるが、この日がすむと農民はいっせいに農作業にとりかかるのが常である（慣習的に13日の休日明けより始めるが、寒さの

第2表 稲作の農事暦

月	イラン暦	Farvardin	Ordibehesht	Khordad	Tir	Mordad	Shahrivar	Mehr	Aban	Azar	Dei	Bahman	Esfand						
	西 暦	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3					
旬		下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中
降水量 ⁽¹⁾ (mm)			47.2	44.3	38.4	32.9	53.4	253.9	197.3	145.7	121.3	97.8	123.5	128.6					
気温 ⁽²⁾ (°C)			13.9	20.1	21.9	23.9	23.7	20.6	15.7	9.6	7.3	8.4	6.1	9.2					
		苗代 いっさい																	
		田植え (champa)																	
		本田整地 (耕起, 砕土, し (第1次) ろかき)																	
		(第2次) (binam)																	
		除 草 収 穫																	
作 業		苗代	本田整地		田植え	除草			収 穫		調 整		本 田 施 肥						
		男女	男		女	女			男 女	男 女		男							
			○牛耕(単畜, アード・ブラウ) ○一部はティラーによる		○手	○手			○稲刈り鎌	○からざお(脱穀) ○もみすり精米機(工場で)		○厩肥, 葉肥などを							
			○barzegar 労働者導入		○karachi 労働者導入 ○yavari														

(注) (1) Arid Zone Research Centre, *Iranian Rainfall Data*, Tehran, 1960.

Iranian Meteorological Department, Ministry of Roads, *Meteorological Yearbook*, 1958, 1959より, 1956, 58, 59年, 3カ年のデータを平均したもの(これら3年はほぼ平年なみの降水量である)。

(2) *Meteorological Yearbook*, 1958, 1959より, 1958, 59年度の平均値。

きびしい年には20日ごろより始める)。

(1) 育苗

まず苗代いっさいである。苗床(tume bijar)に使う土地を牛で耕起し、次いで足で碎土する。手で代かきをした後、苗代を4～9平方メートルくらいの大きさに区画する。つぎに、苗代用地の周囲を柴などで囲い込み、牛や犬などが立ち入れないようにする。

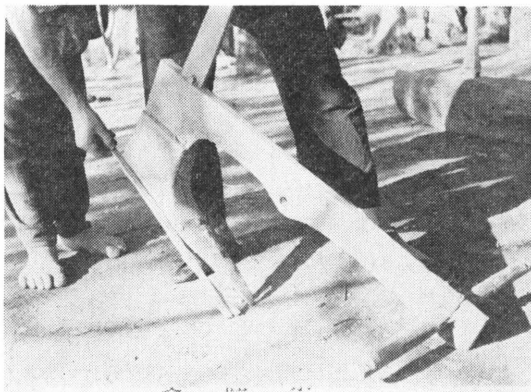
一方、種子予措はつぎのようにして行なう。まず種子(tokhome jow)をマニラ麻の袋の中に入れ、3日ほど水に浸しておく。次いで、これを水中より引き上げ、farkhanehといわれる炊事やもみの乾燥に使う部屋に移す。ここで種子を別の容器に入れ、farkhanehにある棚にのせ火をたき火気で熱する。しばらくすると種子に小さい芽が出はじめるが、これが5～10ミリメートルくらいまで伸びたら、室内の温度を徐々に下げる。次いで、代かきの終わった苗代に3～4センチメートルほど湛水し、この水が澄んできたら播種する(これは種子のかたよりを防ぐためである)。播種後3日間ほど苗代に湛水しておいたのち、水をひき、苗代の表面に米わら(sukhte kah)を敷き、スズメやその他の鳥の害を防ぐ。苗代面積は経験的に決まっており、ヘクタールにつき100平方メートルが、また播種量は125キログラムが標準的な値となっている。

(2) 品種

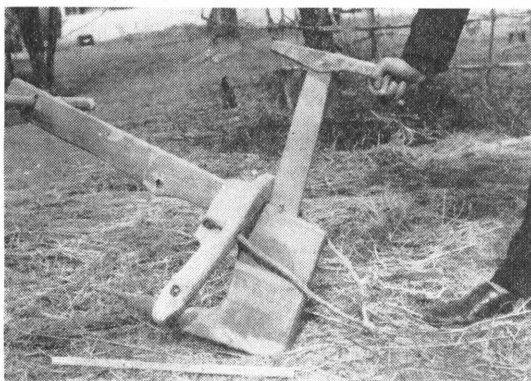
イランで栽培されている稲の品種には、短粒種、長粒種、中粒種の3種のバラエティがある。短粒種(short grade variety)は通常 gerdeh と呼ばれるもので、これには champa, gharib, ubu, guluh などが含まれる。また、中粒種(medium grade variety)には binam, rasmi, anburbu などがある。長粒種は sadri と総称され、sadri domsiyah, tarom, mūla'i, sadri donsefid, sadri domzard などの品種が含まれる。gerdeh は早生種で sadri と比べ収量は多いが、味は悪く、価格も低い。農民は市販用に sadri や中粒種を栽培し、自給用に gerdeh を栽培するのが常であるが、sadri の作付けは相対的にふえているようである。

(3) 本田整地

苗代いっさいと平行して、本田整地が行なわれる。まず、耕起であるが、これは単畜(雄牛)で写真(1)、(2)にみられるようなアード・プラウを使ってなされる。耕起は2度行なう。第1次耕起を pourkani-zani といい、縦方向に耕起する。次いで、同じアード・プラウで doukaleh-zani といわれる横方向の耕起をする。これらの作業



(1) スキ



(2) スキ



(3) pishkaval (板ハロー)

が終われば、灌漑しやすいように田をいくつかの小さな区画に分け、区画の境に20～30センチメートルの高さの畦を作る(marz-kani)。この pourkani と doukaleh を行なっただけで代かきをするのが普通であるが、ときには ouran と称される碎土を行なうこともある。代かきは牛に牽引された pishkaval という板ハロー(写真3)

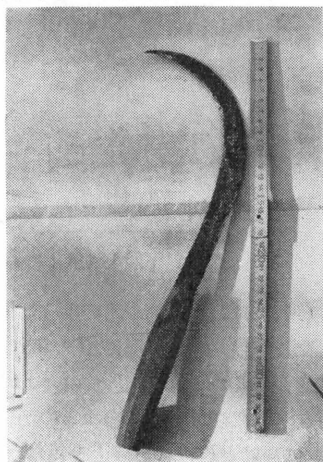
を使って行なう。従来、本田整地過程には1頭だての雄牛(warzaといわれる。ときには雌牛<gav>を使うこともある)が使われることが一般的であった。しかし、近年水田における自動耕耘機(5~8馬力)の導入が進み、牛に代わってリジャーをつけたティラーによって耕耘するケースがふえており、今後それは増加の傾向にある。これらの本田整地作業は苗代作業、とくに苗の発育状況に合わせて行なわれることはいうまでもない。

(4) 田植えならびに本田管理

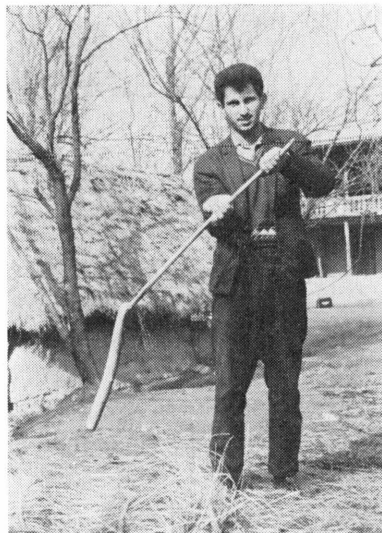
田植えは5月上旬ごろから始まり、2~3週間続く。正条植えは導入されていず、乱雑植えが行なわれている。田植えが終わった後に除草がなされる。これは2回行ない、第1次除草をvejín, 第2次をdobarehという。vejínは田植えの2週間後に始まり、dobarehはvejínの2週間後に行なわれる。田植えが全部終わった後に、1, 2日中休みしてvejínを行ない、これが終わったら同じく1, 2日休んでdobarehを行なうのが普通である。除草は2度するのが普通であるが、ときには第3次除草をも行なう農家もある。作業はくわではなく、もっぱら手で行なう。

つぎに施肥について。化学肥料の使用は非常に低い段階にある。1961年ころから一部の農家で若干化学肥料の導入が行なわれたが、農民にとり化学肥料は割高につくため、普及するにいたっていない。そこで厩肥が地力維持の主要な役割を果たしている。収穫後に牛は刈取り後の田に放牧されるが、放牧された牛の施肥作用と糞牧や舎飼いによって得られた厩肥の投入によっている。後者は冬期に水田に運ぶが、田に均一にまくのではなく、何か所かに山にしておくだけである。厩肥のほかに、ポプラなどの落葉樹を

保有しているものは自己が保有する木の枯葉を冬期に集め、これをかごに入れて田に運んでいる。これが農民によって意識的になされる地力維持のための方策であるが、このほかに、水田に流れてくる水は多量の肥沃性に富んだ粘土



(4) 稲刈り鎌



(5) jakubi (からざお)



(6) 風選

やカリ分を含んでおり、この水が給肥作用を果たしている。

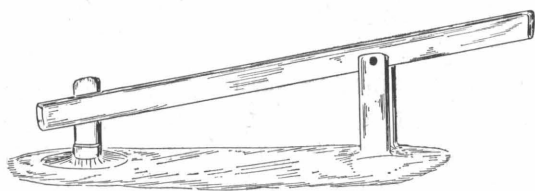
(5) 収穫、調整、貯蔵

除草のつぎになされるおもな作業は収穫作業である。稲刈り(boj-bini)時期は品種によって異なるが早生種であるchampaは8月中旬頃より始まり、もっともおそいbinamで9月下旬には終わる。作業は稲刈り鎌(写真4)で行なうが、マーザンデラン地方のように高刈りでなく、地上20センチメートルほどの高さで刈られ、

刈株は結束する(結束された稲株をmoshtといっているが、大きさは日本とほぼ同じくらいである)。第2表からも明らかなように、カスピ海地方は夏雨型で、とくに収穫期には降雨が多い。そこで稲刈りは晴天のときをみはからって行なわれるが、結束した稲はそのまま切株の上で1日から2日ほど乾燥する(これをaftabiという。地乾が1日の場合aftabi,これが2日になればdo aftabiといわれる)。次いで、稲束を集めて納屋(tiranbar)に入れ、納屋の中でふたたび架乾する。

完全に乾燥すれば脱穀に移るが、一度に全部脱穀してしまうのではなく、必要量だけ徐々に行なう。脱穀は

第2図 足踏みもみすり器 (patang)



jakubi と称する「からざお」(写真5)で行なう。kuluch といわれる小屋の中で、乾燥した稲束を木製のからざおで打って脱穀する。ついで風選し(写真6), もみをkerbi という直径50センチメートル、高さ15~20センチメートルぐらいのわら製の容器に入れる。farkhaneh の壁には棚が作られているが、この棚の上にもみを入れた kerbi を重ねる。そして、farkhaneh の火床で火を燃やし、熱気によってもみを乾燥する。farkhaneh の中ではこのようにして15日間ほどもみの乾燥を続ける。このような方法によるため、乾燥にかなりの時間がかかり、またそのうえ一度に乾燥しうる量も限られる。したがって脱穀作業も乾燥の速度に合わせて行なわれることになる。

もみが乾燥すれば、もみすり、精米に移るが、これは現在ではすべて機械によっている。15、6年ほど前までは patang という足踏みの木製もみすり器(第2図参照)を利用していたが、現在ではこれは完全に姿を消している。幹線道路沿いの多くの村にはもみすり工場があり、農民はもみをここまで馬なり車なりで運び、工賃払ってもみすりを行なう。なお、もみすりも精米が必要になった時々に行ない、一時に全量のもみすりをするとはしない。

小作料の支払い、商人への売却、自家消費などが必要になったときに、必要量を脱穀、乾燥、精米する。残りは稲束のまま、tiranbar 内で架乾、貯蔵しておく。なお、自家飯米などの精米は、木製の大きな箱に入れて貯蔵する。

上に述べたようなからざお法によって脱穀し、また farkhaneh 内で火によるもみ乾燥の際、温度の下げ方が適度でないため、碎米の率が非常に高くなっている。

III

つぎに労働力について述べよう。イスラーム諸国ではイスラーム教の女性隔離より、婦女子は農作業に従事しないものとされている。事実、イラン中央高原地方では婦女子は農作業に参加することはまずない。これをイスラーム教のせいにするか否かには疑問があるにしても、

イランでも大部分の地方では女性は農作業に従事していないことは確かである。しかし、これに反し、アルボルズ山脈の北側の北部イランでは女子も農作業を行なっている。多くの場合には非常に重要な役割を果たしているのである。北東部のゴルガン地方では、女子が綿摘み作業の中で主要な役割を果たしているし、また、カスピ海沿岸地方の茶栽培、タバコ栽培では、茶摘み作業、収穫、調整作業の中で主要な労働力を提供している。同じく、稲作でも女子労働力は主要なウエイトを占めているのであるが、以下、作業別に男女別の農作業への参加を略述してみよう(第2表参照)。

まず、苗代整地、種子予措など育苗に関する作業であるが、これはおのおのの作業の内容によって男女が共に行なう。つぎに男は牛を使って耕起・代かきなどの本田整地作業を行なう。牛を使うという作業の性質上、女子がこの作業に参加することはない。一方、移植のために整地された田には、女子が田植えをする。田植えは除草・収穫と並び、稲作でもっとも労力を要するものであるが、これは完全に女子の労働力のみによってなされる。男はいっさい田植え作業には参加しない。また男は田植え作業をすることを恥と考えている。つぎに2回除草が行なわれるが、これも完全に女子の担当となっている。収穫作業は男女共に行ない、稲束の小屋(kuluche)への運搬、からざおによる脱穀、farkhaneh での乾燥などの作業も、男女の協業によっている。また風選は女子だけが行なう。

以上みたように、稲作における女子労働力のウエイトは非常に高く、必要な女子労働力を確保することは、稲作を行なうための必須条件となっている。このため、当地方では一般に早婚であり、一夫多妻が相対的に多く、また妻が死亡した場合にも可及的速かに後妻をもらっている。なお、女子が農作業に参加しない高原地方では、女子が屋外にいるときには必ずチャドルをかぶっており、さらに女子隔離的な要素が強くみられるが、カスピ海地方ではチャドルは外出用——むしろ晴着の代わり——に使うだけで、普段はいっさい顔を布でおおったりはしない。また、閉鎖的な面もなく、調査の初期より筆者は男に対すると同じ程度に接することもできた。

経営規模に対し、自家労働力の中より女子労働力を調達しえない場合には、雇用労働者を導入することになる。この雇用労働者には日雇いと季節雇いとがみられる。季節雇い労働者には2種類あり、女の季節労働者は karachi と呼ばれ、男は barzegar といわれている。karachi 労

現地報告

労働者は上に述べた女子のみが労働をする田植え、第1次除草、第2次除草の全期間雇用される。かの女たちは一定区画を委託されるのではなく、雇用者とともに働く。労働時間は(雇用者も同じであるが)とくに田植え時には長く、夜明けとともに始まり、日没まで続け、1日の労働時間は12時間をゆうに越える。このため karachi 労働者は村内もしくは近隣の村より調達されるのが一般的である。さもない場合には雇用期間中、雇用主宅に住み込まねばならない。かの女たちには労賃として 10 quti (330キログラム)の米(champa 種)が支給されるほか、作業衣と食事が提供される。この 10 quti の米は契約時に 1 quti が支払われ、残りの 9 quti は収穫後に渡される(1キログラムの champa はほぼ10リアルで、10 quti で 3300リアルになる)。

karachi 労働者の雇用はとくに上層、中層農家に多く、村内の下層農家の婦女子や土地を保有しない農家の女子労働者を雇っている。この場合、親戚間で雇用関係が結ばれることが多い。

karachi 労働者を雇用するほか、必要時に日雇い労働者が導入(日給 100 リアルくらい。1時間10リアルがだいたい目安になっている)されるが、これ以外に田植え時には、農家間での労働力交換がひんばんに行なわれる。これはギーラン地方では yavar もしくは komak といわれ、字義どおりに訳すなら「手助け」ということになる。yavar はかなり繁く行なわれるが、とくに親戚間で行なわれるのが一般的である。

田植え・除草期における karachi, yavar などによる女子労働力の導入のほか、本田整地作業過程にも男子労働者が雇用される場合がある。すでに述べたように本田整地は役牛で行なうが、経営規模に比し男子の本田整地作業に従事する者の数が少ない農家では、この作業過程に男子の季節労働者を雇用する。この季節労働者が barzegar とよばれるものである(nougandar と呼ばれる)。barzegar には村内外の土地を保有しない農家や零細規模経営農家の二、三男、ときには家長が雇われる。雇用期間は2~3カ月で、主要作業は本田整地、とくに役牛を使つての作業である。労賃は6000~7000リアルで、現金の分賦払いが普通である。barzegar の雇用形態には2種類ある。第1は雇用期間中、連日雇われるもの、第2は半分、すなわち、2日間は自己の水田で働き、つぎの2日を雇用者の水田で働く、つまり雇用期間中半分だけ雇用されるものである。第1の形態は barzegari chaharruzi と呼ばれ、これは「4日の労働者」という意味で、第2

は「2日の労働者」(barzegari dowruzi) と呼ばれる。この barzegar にも、karachi 同様親戚間での雇用が比較的多い。

当地方の稲作農家では yavar のみならず、karachi, barzegar など季節労働者を雇用する農家の数はかなり多い。筆者が今回悉皆調査をしたハサナバード村では土地保有農家18戸のうち、9戸が barzegar を、11戸が karachi 労働者を雇用している。土地を保有しない農家の保有農家に対する割合はかなり高いが(ハサナバード村では18戸の保有農家に対し、7戸の土地を保有しない農家が存する)、これらの農家は上に述べたような karachi, barzegar 労働者、または日雇い労働者として雇われ、これらの農業労働によって生計をささえているのである。

(付記) この報告は、昭和40年度合同プロジェクト「農業生産性分科会」の研究成果の一部である。

(調査研究部中東調査室)